

演劇活動とその効果

(Durchführung einer Theater-AG und deren Effektivität)

酒井康子 Sakai, Yasuko (元ライブチッヒ大学 東アジア研究所
日本学科 Universität Leipzig, Ostasiatisches Institut, Japanologie)

要旨/Zusammenfassung

本稿では、筆者が長年ライブチッヒ大学で行って来た授業の一環である演劇活動について報告し、その活動の意義と教師の役割、ひいては演劇活動が日本語教育にもたらす成果について考えてみたい。学生相互の協同作業、そして、その役割を通して演じる側と観客側とで共有できる**一体感**と**共鳴**を通して、筆者は多くのことを学んだ。筆者は、演劇活動を、日常の教室内の授業から現実へ至る間の道程と捉える。演劇も人工的な設定ではあるが、そこでの**疑似体験**から学習者は人間同士のコミュニケーションに表れる「間(ま)」の取り方を学ぶ事ができる。また、凝縮された時間の中で、学生は様々な**対話**を行う。台詞としての日本語は手段であり、教師自身の役割は単に火付け役である。これまでの体験から、総合的な授業の試みとしての演劇を提案する。

In diesem Manuskript möchte ich von den Theateraktivitäten als einem Teil des von mir über viele Jahre an der Universität Leipzig gegebenen Unterrichts berichten, sowie ihre Bedeutung, „die Rolle des Lehrers“ und ferner die Folgen, welche die Theateraktivitäten für die Japanischausbildung haben, betrachten. Ich selbst habe viel gelernt von den Sympathien und dem Einheitsgefühl der Studenten untereinander, aber auch zwischen ihnen als Darstellern und dem Publikum. Ich begreife den Terminus „Theateraktivität“ hier als den Übergang vom alltäglichen Unterricht zur realen Gesellschaft. Zwar handelt es sich bei Theater um künstlich konstruierte Szenarien, jedoch können die Teilnehmer mittels derartig simulierter Erfahrungen das „Zwischen (ma)“ in den zwischenmenschlichen Beziehungen lernen. Überdies kommt es in der begrenzten Zeit, die zur Vorbereitung und Umsetzung eines Stückes zur Verfügung steht, zu mannigfaltigen Interaktionen zwischen den Studenten. Japanisch ist dabei ein Werkzeug, die Rolle des Lehrers selbst besteht lediglich darin, das Feuer zu entfachen. Basierend auf den bisherigen Erfahrungen würde ich das Theater als Versuch eines synthetischen Unterrichts vorschlagen.

1 はじめに

筆者は過去 14 年間に 6 回演劇活動を選択授業の一環として組み入れてきた。選択授業とは単位が出ない自由科目である。時間数は週 1 回 90 分、学期中 15 回、学期終了時にその成果を舞台上で発表することを基本として行った。選択授業であることから、全学年参加可能とした。2010 年は日独交流 150 周年記念行事の一環として、三重県日独協会からの招待を受け、過疎地である三重県美杉町小学校と三重県総合文化ホールで公演を行う機会に恵まれた。これは学生にとっても大きな励みとなった。今回の報告は、過去 6 学期分の活動、主としてその経験から得た知見に基づいて、筆者の行ってきた演劇活動の内容を紹介し、その意義と効果について考察するものである。

2 演劇活動の概要

2.1 授業の流れ

先ず参加する学生たちの人数によって台本選びを始めた。内容的には、現代日本の社会問題を含むものを中心に、学生たちと論議を重ねた上で選択した。それから、日本語からドイツ語へ、またはその逆へ翻訳した。その際、バチューラー 1 年生からマスター (およびマギスター) の学生までの自由参加であるため、グループごとに上級生が下級生を指導していくことにし、その後、台本の意味を理解したうえで、役割分析をおこない、各自が自由に役割を選択するというかたちをとった。その際、筆者はあくまでも個人の意思を尊重することに配慮した。そして立ち稽古に入った。その間に舞台装置、衣装、音楽、ビラ作りなどの作業も平行して進めていった。こうした作業を一学期間 15 週の授業で行わなければならない、時間的な制約が一番の難題であった。各実施学期とも、学期末には成果を舞台上で披露することを最終ゴールとしてきた。特に三重公演の場合は、絶好の機会に恵まれたこともあり、週末を返上して稽古に励んだ。

2.2 演劇活動クラスの特徴

上述したように、あくまで単位のおりない選択授業であったため、学期開始までどんな学生がどのくらい参加してくるか分からない。平均して常時、13 名ほどの参加者がいた。2 学期生以上の参加を許可したために、一年間の日本留学を終え自在に日本語をあやつる学生から、未だ発音自体も怪しい 2 学期生までが参加した。通常のクラスでは味わえない構成である。筆者はここに目を付け、上級の学生が後輩の指導が行えるように、各グループに先輩後輩混合の小グループを作った。特に台本が

決まり、脚本がドイツ語の場合は日本語に、日本語の場合はドイツ語に翻訳する作業では、先輩学生たちが後輩を見事に指導し、平均して1回分の授業で各分担箇所が仕上がった。それでも翻訳しきれない箇所は、グループ内の全員が集まって、脚本全体の流れを考慮しながら議論し合った。この作業で、筆者は既に演劇活動の成功を確信した。これは全学年混合の醍醐味であり、リーダー格の学生が見つければ、上手くいくという確信である。

グループが次第にまとまりを見せ、皆が目的に向けて心をついにしようとする一体感が生まれ始める。参加者が役割分析をする際も、各自が忌憚なく意見を述べ合う姿は、実は通常の語学のクラスでは見られないものであった。役割を決定する際にもこの光景が見られた。一つの役柄に二人の応募者があり、筆者はその意志を尊重して、二人一役としたこともある。「この役を演じたい」という姿勢を大切にされたからである。すでに3時間目の授業から台本読み合わせに入り、各自の取り組み姿勢が現れてくる。4時間目からの立ち稽古に際しては、演劇学科から応援を頼んで、発声練習をしてもらうこと、さらに様々な日本人留学生、在住の日本人の方々に応援を頼み、発音のチェックをはじめ、場面ごとの部分練習の立会指導を教師側から提案した。この個別練習の中で、日頃日本人とは接触の少ない初級の学生たちは、たどたどしい日本語ながら、懸命に活きたコミュニケーションを行った。こうした様々な人々とのつながりの中に、日ごろのクラス内だけでは得られない形の異なった調和、すなわち、この演劇を成功させようとする人々の意気込みが生まれていった。

後から思うに、この他者との交わり、クラスを離れた他との出会いの過程が大切だったと感じる。演技上の小さな動きにも、皆が集中し意見を出し合う。そこから思いがけないいいものが生まれてくる。皆のアイデアが集積し、形が出来上がっていく。筆者は日本人として、細部に亘るアクセント、また「間(ま)」の取り方などをアドバイスしていった。こちらから指導する必要もないほど、衣装、音響、照明、舞台装置作りが、学生間で役割分担され、その組織立った動きには、まず日頃の教室では見られない積極性があった。同時に、最後のゴールである発表舞台探しも学生たちが自分たちで交渉し、学生自治体から援助金を受けるための申請に至るまで、すべてが参加学生主導で行われていった。やがてアイデア満載のビラやポスターも完成し、客集めの宣伝も学生同士のロコミで広がった。そしてリハーサルを迎えた。

本章を終える前に、もう一つ加えておきたい点がある。演劇活動クラスが可能にする**授業時空間の広がり**である。通常の授

業形態は、学校教育が教室とう既成空間に机・椅子という装置を以て固定化された時空間の中での授業であるが、この演劇活動の時空間は、学生が自分の身体と向き合い、触れ合うことを可能にする。その意味で、学年・年齢層、固定化(教室・机・椅子)時空間からの解放という枠組においては、コミュニケーションが身体的にも精神的にも自由な時空間で行われるという稀有な体験に繋がったと言える。

3 演劇活動の意義と効果

3.1 疑似体験

さきにも述べたように、筆者は演劇活動を日常の教室内の授業から現実社会へいたる間の道程と捉える。そしてその意義についてはいろいろ考えられるが、一つには、とりわけドイツで行う日本語の授業の場合、教室で行う授業は一步外に出ればドイツ語環境であることから、教室は人工的な設定ということによる。演劇も人工的な設定ではあるが、そこでの疑似体験から人と接するときの「間」の取り方の学習することができる。

教室内の文法練習、日本語の会話などを通して基礎的な事を学んだ後、ごく一般的にも学生たちは、自分たちの使う日本語がどれだけ実際に通じるのかに疑問を持ち始めるが、さらに演劇活動を行うことによって、日本語を使って話す際の母語との相違、実際の動きの差に気付くことができると思う。さらに言えば、人間同士が取る自然な間、つまり人間同士間の物理的・心理的距離、さらに言葉と言葉の間、を学ぶ事ができるのである。演劇活動に参加してくる学生たちは、ほとんどの場合、役柄を日本人として演じなければならず、その際、日本人の取る間は自分たちのそれとは微妙に異なっていることに気付くことになるが、これは座って教科書を見ては得られないものであろう。著者が舞台監督として注意を促す際、大切にすることは、俯瞰的に見て、舞台に立つ全ての人間、セリフの無い人間の動き一つ一つも総合的には一幅の絵のごとく大切な要素となるということである。演劇が成功するかどうかは、役者同士の輪がいかに保たれ、各自がどこまでその役柄になりきれぬかに掛かってくる。練習を重ねるにつれて、全員の集中度が高まり、やがて一体感が生まれる。完全に役柄を咀嚼し、絶え間なく生まれてくる多様な間の大切さを理解した時に、自然な動きができるようになってくる。こうした間や自然な動きは、学生一人ひとりが試行錯誤を重ねて役作りをし、さらにメンバー全員の声を聴きながら練習を重ねるうちに身についてくるもので、セリフ、動き、表情が自然だと感じられるまでには、立ち稽古

に入ってから相当の時間を要した。自然だと感じるのは、彼らが役割になりきったということだと思ふ。

3.2 伝えようとする心

さらに、より大切な意義は、想いを伝えようとする姿勢ではないだろうか。学生たちは既に大人であり、個人差はあるものの、彼らのこれまでの人生から母語なら十分にその意思を伝えることができるのである。その点では、ドイツ語圏の文化はかなりストレートに表現するようである。言いたいことは言語化して他者に伝える、という文化のようだ。日本語・日本文化社会のように、動きで、あるいは、表情で間接的に他者に分かってもらおうという部分は少ないようだ。今、彼らは日本語を媒介として他者に言いたいことを伝えなければならない。役柄を通して伝えようとするのは、彼ら一人ひとりの生き様であるかもしれない。筆者は、彼らが役柄を自ら希望して選ぶ過程で、役柄に対して無意識の自己投影が行われていると考えている。それは何も、大上段にかまえ、人生観を伝えたいということではなく、今、自らが抱えている悩み、苦しみ、喜びであるかもしれない。役割分析はするものの、学生が役割を選び取った時点で、自分自身の解釈が行われているはずである。回を重ねるにつれ、その伝えようとするものが自ずと表れ出してくれば、他者に伝わるのである。この過程において、学生はその役割を通じた自分自身とたえず向き合っ対話しているのである。

役割に自己投影を行い、共有するものを膨らませ、伝えたいという心が生まれる。筆者は、この心を引き出させるところに演劇活動の大切な意義を見る。

3.3 対話の重要性

舞台上の学生間の一体感が何かを伝え、観る者の側に伝わり、**共鳴**が起こる。観客もまた舞台上に引きつけられ自己をその中に重ね合わせていく。そして、その相互作用が双方に大きな感動を起こさせる。そこには脚本家や演出家の意図しなかった効果も生まれてくるかもしれない。しかし、それがまた演劇の醍醐味と言えるのではないか。学生たちの真摯さが稚拙でも舞台上から観客を巻き込んでいったことを筆者自身幾度も経験している。伝えようとする意志が伝わり、観るものとの**対話**が始まる。演劇家として日本語教育界においても近来とみに注目されてきている平田オリザは、この**対話**の必要性を説く。ここで平田オリザの演劇入門の一説を引用しておこう。平田は演劇の役割を次のように述べている[平田1995: 200-201]。

「二十世紀末の日本においては、国家、企業、学校といった共同体が強要するコンテキストが、音を立てて崩れ始めている。コンテキストを強要され続けてきた、そしていまも強要され続けている子供たちは、しかし、その仮想のコンテキストの無効性を直感し、世界をリアルに感ずる手段を、まったく持たない状況にさらされている。私たちは、もう一度、自分たちの共同体のコンテキストを、時間をかけて摺り合わせ、編み上げる作業からはじめる必要があるのだろう。(中略) 時間をかけて、主体的に決定させるところから出発する必要があるのだろう。そして、その時に、演劇という表現の役割は小さくないだろうというのが演劇を生業としてしまった私の、いささか希望的な観測である。(中略) これまで見て来たように、演劇は、以下の三つの対話を要請し、また内包する表現である。

- 演劇作品内での、**役柄同士の対話**
- 演劇集団内での、劇作家、演出家、俳優といった**個々人間の対話**
- 劇場における表現する側と、**それを見る側との対話**

筆者は、さらにもう一つ、**自己との対話としての内省の重要性**も付け加えたい。

さらに、平田は「対話を通してコンテキストを摺り合わせ、そしてコンテキストの共有、新しい共同体の新しいコンテキストの生成」が大切だと説き、「この対話の過程で、他者のコンテキストとの摺り合わせにより、自己のコンテキストが変容していくことに寛容であることが前提になる」と言っている [平田 1995: 201-202]。平田は対話と会話をはっきり区別している。「会話は単におしゃべりであり、対話は情報を伝え合うもの」 [平田・牧野・野山・川村・伊東 2012: 010] であると。

4 教師の役割

では、そこでの教師の役割とは何であろうか。彼らの表現の場を確保して、彼らの内なる声を引き出す事ができればいいように思う。

考えてみれば、学生たちが、外国語としての日本語を学び話すことそのものが、一種の役割を演じているのだと言えるのではないだろうか。日本語を話す自分を通して違う自分をさらけ出しているのかもしれない。そこには伝えようとする心があり、教師はその心を共有し、いかに母語ではない言葉で、動きで他者に伝えられるかを導いていかなければならない。そのためには、伝えようとする心を引き出さなければならない。演劇活動

はそのために試みる価値のある一つの方法であろう。なぜなら学生たちは(そこで)自ら働きかけ、試行錯誤しながら、**生きて**いる。他者と対話するために、伝えるために取り組む彼らの姿はまさに活き活きとしている。**対話**は、自分自身と、そして他の学生たちと、そして観客側との様々な場面で行われているはずだ。そこにはすでに教師の役割はもうないと言ってもよい。伝えたいという心に点火するだけでよいのだ。とはいえ、これは容易なことではなく、異なった価値観を持つ他者と分かり合うためには、まず、分かり合いたいという気持ちが第一で、そのためには教師自らが積極的に心を開き、自分の殻から一歩踏み出す勇気が必要だ。

日本学 10 周年創立記念が行われたとき、卒業生に頼んで学生時代を語ってもらったことがあった。その中の一人が日本学で一番印象に残ったこととして演劇活動を語った。当時はまだ 2 学期生で、発音すら怪しかった彼女が主演を選んだのだ。11 人ほどが、本来の授業の後、夜遅くまで休日返上で稽古に励んだ。筆者にとっても演劇活動を始めた初期のころの大変な経験であった。しかし、彼女にとってはその思い出が残っていると言う。どちらかと言えば、おとなしい学生だと思っていたが、舞台上では堂々と演じたのだ。もともと演劇が好きで参加を希望したのであろう。授業中は自ら発言することはほとんどなかったが、舞台上の彼女が大きく見えたことを記憶している。この経験から、筆者は学生たちの、教室では見せない他の面を演劇活動を通して知ることができた。どういうわけか、選択科目の演劇に参加してくる学生たちは、日ごろ目立たない学生たちが多かった。人数の多い普通のクラスでは、こうした学生たちの声は教師側には届かない。彼らと対話したいという思いから筆者と学生との一対一の対話が始まり、役割を選ぶ過程で、学生たちの人柄に触れることができたように思う。毎回、グループで試行錯誤を繰り返し、演劇を完成させていく。学生同士正面からぶつかることも、母語での議論が長引くこともあった。次第に一つの目的に向かっていくのだという意識が全員の中に芽生えていき、同じ方向を向くという姿勢が波紋のように広がっていくのを私自身も実感した。他に分かってもらおうという思いこそ総合的な学習に行き着くと信じる。

これは筆者自身の体験談になるのだが、筆者は若いころ、卒論を書くために、テーマであるテネシー・ウィリアムズの演劇を見に行った。目的は演劇の内容であったのだが、観劇しているうちに、すっかり舞台に巻き込まれてしまっている自分を感じた。演じる人たちの中に同化してしまっている自分を見た。そしてそのことをすでに計算に入れている演出家の意図、さらに言えば劇作家の目論見を見たように思う。舞台と観客(私)と

演出家・劇作家、この三つの点が結びつけば不思議な感覚が生まれ、それは感動へと繋がっていくという体験をし、卒論はその時点で、演劇形式そのものへと変更せざるを得なかったのである。この一体感は何なのだろう。以来ずっとそれについて考えることになった。真にすぐれた演劇というものは、観る側に何かを伝え、それが各々にどのような作用を及ぼすかまでは計算されてはいないのかもしれないが、それでいいと思う。なぜなら、観る側も、その時その時で様々な思いを抱えているであろうことから、伝わってくるものは違っていいのだ。

5 学生へのアンケート

上述したような卒業生の感想を耳にして、演劇活動に参加してくる学生の動機を知るために、以下のアンケートを行った。今回のアンケートは三重での日独交流 150 周年記念公演に参加した学生たち全員 (11 名) を対象とした。

1. これまで演劇に参加したことがあるか。
2. どうして今回日本語での演劇をやってみようと思ったか。
3. 演じる前と後では自分の中で何かが変わったか。
4. この活動の後で自分の日本語能力が伸びたと思うか。
5. 演劇は日本語学習に効果的か、どうか。その理由は。
6. 日本語で演じることで、何が一番難しかったか。
7. 上演の際、観客のどんな反応に気づいたか。

結果

1. 8名はすでに何らかの形で演劇に参加したことがある。
2. 日本語の知識を増やしたい。言葉の勉強が主目的 (自立した日本語の使い手になる、自信をつけたいなど) 6
楽しい 4
日本の文化と出会える 6
友だちとの交流 2
日常生活に自信をつけたい 1
日本の演劇文化・演劇の表現・身振りに興味 3
日本語の演劇にチャレンジ 1
3. 日本語を話すことに喜び、モチベーションが高まった 5
日本語の難しいテキストを読むことへの意欲が増した 2
(日本語の授業以外)
日本文化、国への興味がより高まった 1
話すことへの自信ができてきた 1
何も変わらなかった 2

4. 日本語を話すことが上達 (言葉に対する勘が養えた、発音、メロディー、言語感覚) 7
 日本語のテキストを読むことが上達 1
 言語知識が増えた(文法、語彙が増える) 3
 変わらない 2
5. 効果的 10
 効果的ではない 0
 無回答 1
 理由
 能動的、遊び感覚のある言葉使用(硬い授業ではない)3
 発音やリズムに意識を集中させることを可能にする 3
 テキストを繰り返し練習、語彙・文法力の強化 5
 聞き取りの強化 1
 理由がない 1
6. 台本の内容に顔の表情・ジェスチャーを合わせていくこと (日独の解釈の相違による) 7
 発音(リズム、強調) 5
 台本(翻訳、理解、暗記) 4
7. 好意的(驚き、楽しむ、熱中、価値を認める、興味) 9
 日本語が分からないドイツ人もその内容を理解した 3
 否定的(演じる側のまちがった発音等で、理解ができない) 1

少ない数のアンケート回答数ではあったが、学生たちが何を求めて演劇活動に参加してきたか、この活動で何を得たかが分かる。彼らは舞台の上に立ち、舞台から観客と対話していたのである。好意的な観客の反応を身をもって体験していたのである。そして何より自らの生き様を伝えたのである。

6 まとめ

演劇は筆者自身、学生時代から興味があった分野である。その演劇を日本語を勉強している学生たちと共有することができ、正直なところ毎回大変な労力と時間が割かれたにもかかわらず、楽しい経験だった。日々の教室での授業の中では得られないものがあった。それが何だったのか、振り返れば、凝縮した時間の中での学生たちの積極的な姿に触れることができたからであろう。活き活きとした彼らの姿と、様々なアイディアに、彼らの通常のクラス授業時とは別の面が現れていた。ここまでやれるのだと筆者が驚かされた一方で、学生自身にとっては自信をつける機会になったと思う。

もう一つ、筆者が演劇に興味を持った理由は、シナリオを作る劇作家、演じる役者、そして、そこにある観客の反応の関係であった。上演は、単に演じることだけではない。そこには人

間同士のつながりが背景にある。切り取られた空間と時間だけで演じているのではない生身の人間の姿が立ち現れ、何かを伝えようとする。それが空間で出会い、個と個の無言の対話となり、一体となったときに、感動が起こる。最近読んだ小説『チョコレートコスモス』に次のような一説があった。

「役者は、人間なんだよ。人間をやるんだよ。人間って、自我、エゴ、自尊心、虚栄心、羞恥心のようなものからできているでしょ。エゴとかプライドって、最も人間臭い、人間の嫌らしさと崇高さと矛盾を含んだ部分だよ。そういったものがない役者が人間をやったって、ちっとも面白くないでしょう。」 [恩田陸 2006: 499]

また、『対話とプロフィシェンシー』で鎌田は述べる。

「個人を超えた他人との社会的なつながりなくして言語を使用する能力が育たない。」 [鎌田修 2012: 015]

演劇活動は**言語的コミュニケーション**と**非言語コミュニケーション**の両面を含む。授業活動として有効であり、さらに日本語教育を生きる人間活動の中で行うために、また個々の学生と向き合った対話を行うために、演劇活動をその一つの試みとして提案したい。そして、それはいずれ教師自身への貴重なフィードバックになると確信するからである。

【参考文献】

- 恩田陸 2006. 『チョコレートコスモス』 毎日新聞社。
鎌田修・嶋田和子 (編著)、平田オリザ・牧野成一・野山宏・川村宏明・伊東祐郎 (著) 2012. 『対話とプロフィシェンシー』 凡人社。
北島春信 1997. 『ドラマで楽しむ中学校劇 1年』 『ドラマで楽しむ中学校劇 2年』 『ドラマで楽しむ中学校劇 3年』 小峰書店。
平田オリザ 1999. 『演劇入門』 講談社現代新書。